



電
腦
歌
姫
ヨ
ス
娘
と

ヨ
ス
プ
レ
ッ
ク
ス
!

SNSで知り合ったレイヤーの
ミキちゃんとは撮影を終え備え
付けのカラオケで歌いだした
彼女と二人で盛り上がっていた

「イェーイ！特別ライブ
楽しんでくれたかな〜☆」

撮影も満足だったようにで
かなりノリノリだ

飛び跳ねている彼女の胸が
揺れているの見ていると
目が合った…

「なんですか？なんかエッチな
視線を感じるんですけどオッ！！！！」



彼女はまんげんらでも
無い様で「うう言った

「良いですよ」

「え？」

「一回衣装着てヤツて
みたかったんです」

「今日とつても楽しかったから
そのお・れい♡」



「ほらおちんちん二んなんにして
期待してたんじゃないんですか？」

「マスターのマイクの処理は
ミ〇にお任せ！」





「では早速〜」

「うわっちよこ〜?」

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ



ちゅわん
ちゅわん

ちゅわん

ちゅわん

ちびっ

「上目遣いすごく可愛いよ
休憩終わったからそのアングルも
撮ってみよう」

「……んやい。」



「うわーおっと」

「うんっ、うんっ.....」

ふふふふ

ふふふふ

「じゅるるー、ぢゅるるー
んあ、んはっ」



ビデオとかで見た事あったけど
実際自分がやってもらこう立場
になると興奮するなあ

「ぢゅるん...ふんごどひゆん...
気持ちいいひゆか?」

いゅん
いゅん
いゅん
いゅん

いゅん
いゅん
いゅん
いゅん

「ああ気持ちいいよ
すぐ射精ちやいそつだ」

そう言うつと彼女の勢いが増した



「あつやバイほんとに
射精る」

「んっ…ああ、射精る」

「んんっ!? んんっ!!」



「えへへっ、濃いのがたつぷり
出ましたねマスター♡」

ドロッ

「すっごく気持ちいいよ
ミキちゃん」

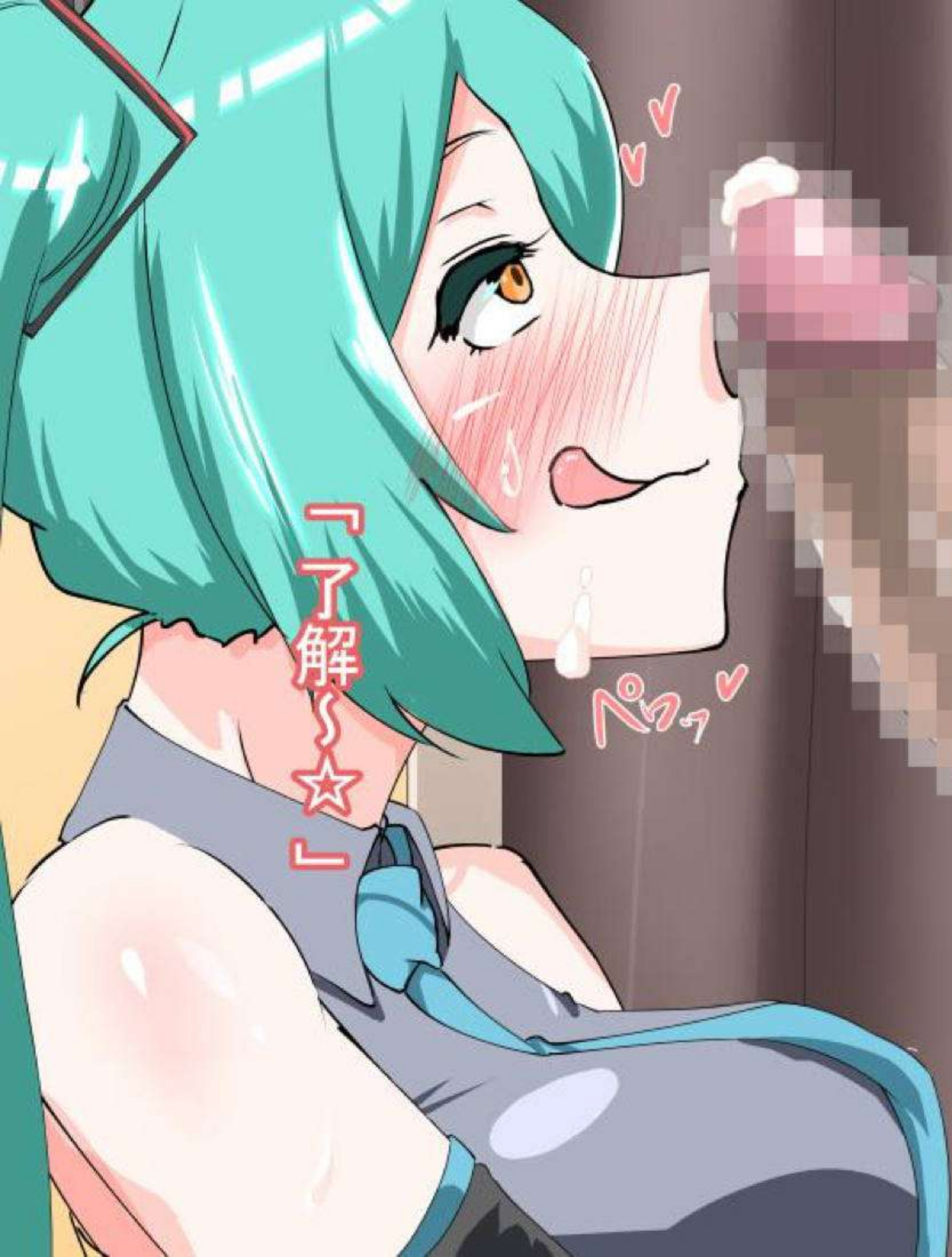
「もうマスター!!
今は皆の歌姫ミキ
なんですから!!」



「名前を間違えちやう
マスターにはお仕置きが必要
ですね！」

「まだまだ元気みたいだし」





「了解☆」

「ああ頼むよMIO」

「マスターもまだまだ満足してないでしょうっ」

「裏側弱い人とか多いですけど
マスターはどうですか？」

「いっあ、そいやらばら」

「んあぶ、
ふふっ
良かった」



「ん」

おはは

おはは

おは

「Jenny」

「ん」

おはは

おは

「じゅるっ……んあ
カハッ、ん」



「ムムム……」

「……ん」

「ん……ん……」

「……ん……ん……」





「……あ……」



オホ!
アハハハ

「んんんん」

アハ

アハ

「オゴツ……」

「Good Job!」

「Voice」

「Thank」

「Love」

「Oh!」

「Love Love Love」





「びしょびしょ、びしょびしょ」

びしょびしょ
びしょびしょ

びしょびしょびしょびしょ

びしょびしょびしょ

びしょびしょ

あっ

「はあ...はあ...」

「はあ...はあ...」

「ミノちゃん……すごい」
上手だよ」

「流石歌手ハンドマイクの
扱いも巧いんだね」

セツ セツ
セツ

ほっ
ムクムク

んん

ムク

んん
んん

「けほッ……
ありがとう、マスター」





「そろそろ

…良いかなMIO?」



「もう聞かないでくたしてよ
マスター!!!」

「恥ずかしいんですけどすからなっー」



「フリンリのくせいの笑
それはミ○なのミキちゃんなの〜」

「フリン、教えますか〜♡」



「マスタあゝ早く早く〜」

「私もうっ待ちきれないよぉ…」

「ミ〇は欲しがりさんだな」

「ほらちよつと待てて…」





早くお早急〜っ

早くお早急〜っ

んっ
んっ

んっ



「あぁー
きたん♡」

「きたん♡」

あー

あー

あー

あー

あー

「歌姫まん」「締め付け良くて
気持ち良いよ」

「くっ……はん……」

「あっ、ミ〇の膣内を
ズンズンしてくるッ」

「マスターのおちんちんが
リズムよくッ……」



「あれ？なんかリズム
ズレて来ちゃつてませんか？」

「私がリズム取つて
あげますから……」

「……腰が……」

「あーん、んんん、んんん」

「んんん……んんん」

「あーん、んんん、んんん……」

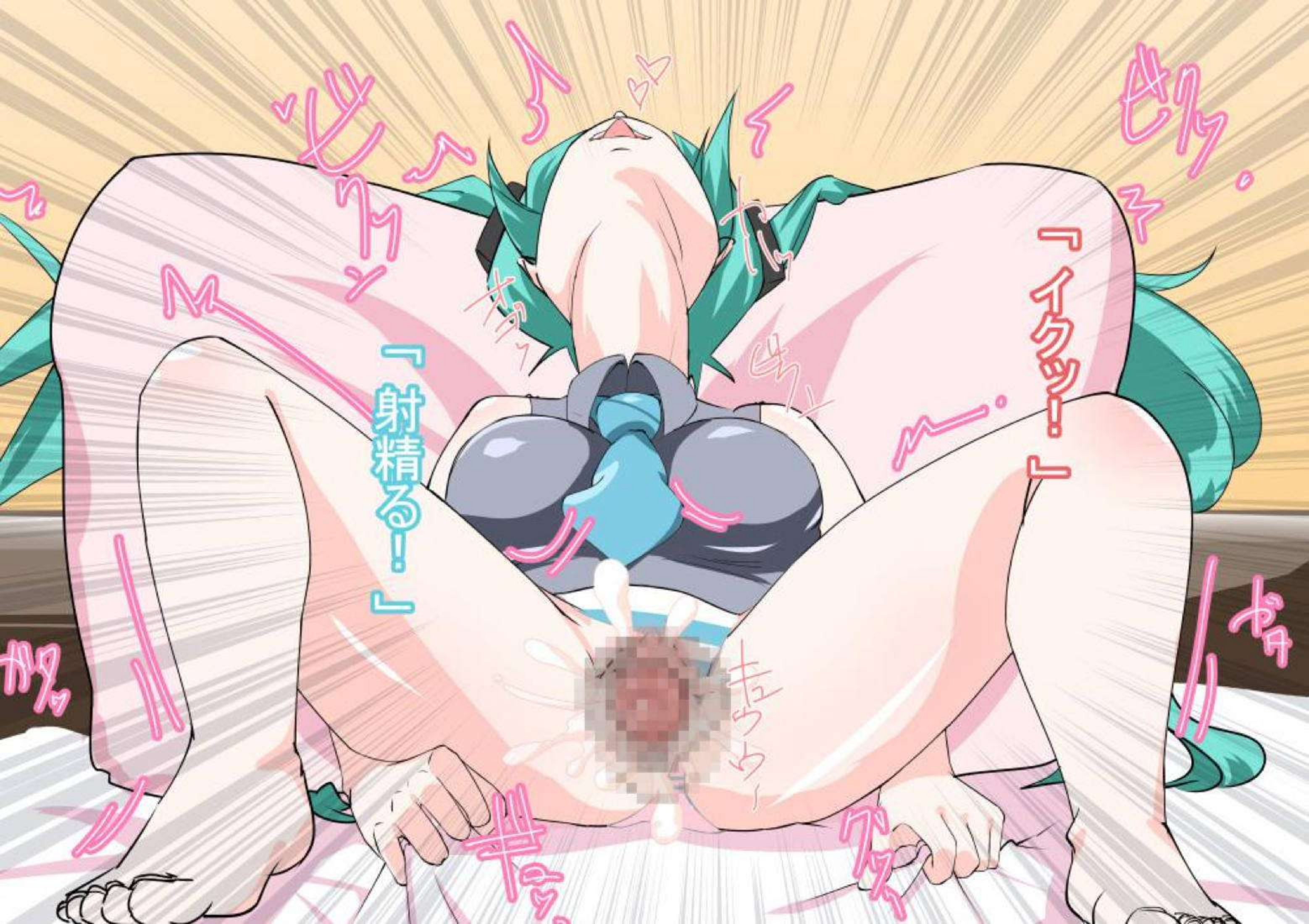


「どうしたの、リズム取って
くれるんじゃないの……？」

「気持ち良くなっちゃってさ、
私、ああ……！」

「俺もそろそろ
やばいッ！」





「射精る！」

「イクッ！」

オム

オム

オム

オム

オム

オム



アハ

アハ

アハ

アハ...

アハ

「アハ」

「アハ」

「アハ」

「アハ」

「うん、じやないってえ
あつ、入つてきたあ♡」

んんん...

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん♡♡

「めん、キちゃん可愛いから
全然治まらなくってー」



「褒めれば良くて話じゃあ♡」

「ちゅちゅより激しい〜」

「あッ」



「もうっバテちっちゃたの?」

「バテてなんかないし」

「じゃあまだまだ大丈夫かな!」

「え、嘘!」



「タフすぎるよ
休憩挟も？」

「俺まだ満足
してないから
もうっ少し頑張っ
てっ」

「イヤッ、
さっきより
良い感じ
当たってっ…」



「じゃあ「うっした方が
良い所」当たる感じ？」

「……なる当」

「一番良い所に
当たっっちゃっ」
「♡enでっ」



「この体位にしてから
締めりが良くなった
んだけど……」

「♡♡♡」

「好きで、
私後ろから
突かれるのが
あ♡♡」

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡





「うん、うん、
おは、おは。」

「はあ……
はあ……」

「うん、おは、
おは……」

うん！

うん

うん

うん。

うん

うん

うん。

うん

うん



「わたっ、私ぞるぞる
ダメかもオ!!」

「まだっ、まだっ
これからでしよっ」

「まだっ、まだっ
これからでしよっ」

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん



「CUTAWAY♡」



ウッ

アッ

ウッ

アッ

アッ

アッ

ウッ

ウッ



アハハハ

「疲れたかなって
思うんですけどお」

「ま、まだやるんですかあ
わわたひそろそろ」

アハハハ

「はあ」

「俺もそろそろキツイし
これで終り」

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アッ

アッ
アッ

アッ

アッ

「これで最後だから
二人で気持ち良く逝って」

アッ

ああ〜♡

アッ

アッ

アッ
「あーっ〜っ〜っ〜っ〜」



「あつ、激しいのがあ
また膣内かき混ぜてへっ……」

「私のまんこ」
ダメになりそ……」

「なんかだいたい
トんどんじゃって……」



「こんなにも続けてやった
」とないからっ♡」

「俺もだよっ」

「おがっくおはっくおはっく」

「腰も勝手に
動いちゃってるっのっ」

アハハハ

ズズ

ズズ

はあ

はあ

アハハハ

あ

アハハ

オ

「私も、プリンとプリン
っだから...」



「...」

「はあ...はあ...
そろそろそろそろよ...」



んんん

んんん

んんん

んんん

「熱いのが
ピュルって挿って
来てる♡」

「んんん
膣内で感じるっ」

「くっ…っは
射精るっ!!」

「あはアッしゅ、凄い
まだこんなに射精する
なんてえー」

「俺もびっくりにだよ
身体の相性バツチリなのかも」

「……そうかも」

「あ、あ、また今度
お願いしようかな」

「じゃあまた
次のイベントの時にも……」

彼女はそいつらに
気絶するおまじない

END...